

2 公娼制——日本による持ちこみと廃娼運動

「一人の可哀想な少女」（蔣渭水、一九二八年一一月一〇日）

私の真向かいの客室には一人の少女がいた。妙齡の一六、七歳、貸し座敷の鑑札を持たない妓女であった。彼女たちは、ここのお店の好意を受けて、一週間ここに泊まって肉体を休めていたのだ。暗い部屋のなかで、近视の私には、彼女たちの姿はおぼろげにしか見えなかつた。〔中略〕編んだ髪は長く背の後ろに垂れ下がり、赤い花模様のズボンに白い上着で、ふとった臀部は性的成熟を示していた。〔中略〕彼女たちは不幸にして貧しい家庭に生まれ、妓女として売られ、挙句の果てにこんな境遇になつてしまつたのだ。これは決して彼女たちの賢愚や美醜に原因があるのでなく、彼女たちの家庭の貧しさが問題なのだ。私は彼女たちを可哀想に思うし、同情し、親身になる。我々は彼女たちのために尽したいと願う。実際数年前にも一度廃娼運動をしたことがある。〔中略〕

これらの醜業婦と無頼漢——野鶲ヤクエと鱸鰻ロモア——は同じ母体——××主義——の生み出したものである。言い換えるなら、君たち両者は××主義の産み落とした奇形児なのだ。〔中略〕君たちは同病相憐れみ、同種相求めるべきだ。どうしておたがいに敵視するのだ？ この世界では、鱸鰻は野鶲を見れば罵り、野鶲も鱸鰻を嫌って会いたがらない。〔中略〕両者は同じ根から生えてきたものであり、鱸鰻は妻をめどるお金がなく、野鶲は境遇のために夫を持つことができない。まさしく俗に言う「君に妻なく我に夫なし、似合いの二人だ」ではないか。団結して夫婦となり、愛のある家庭を築き、夫唱婦隨、同甘共苦、ともに闘つて共通の未来を切り開くことによつて、両者の敵である××主義の進攻に立ち向かうのが正しいのだ。もしもこのようにできたならば、それこそ台湾解放運動においてもう一つの新銃軍をつくることになる。だから、我々は両者を助け、この目的に到達することを願うのだ。勇敢な鱸鰻、可哀想な

少女よ、はやく自覚めるのだ！

〔「兩個可憐的少女」『台湾民報』一九二八年一月一〇日〕

解説 公娼制度は、日本による植民統治政策の一環として台湾でも施行された。一九〇六（明治三九）年には「貸座敷及娼妓取締規則」が、一九一一（明治四四）年には総督府令第六九号として「芸妓酌婦取締規則」が制定されるなど、一連の法律による整備がなされていった。もともと存在していた台湾人娼妓に加えて、植民統治の進行につれて、日本から渡航してきた日本人娼妓も増加した。また朝鮮出身の娼妓も存在した。それらの娼妓を管理し、また性病の蔓延を防ぐという目的から公娼制度が必要とされたのである。

公娼制度の下で、妓院（貸座敷）には営業区域が指定され、台湾人妓院と日本人妓院はそれぞれ別の区域で営業した。それぞれの妓院には「同業公会」が、娼妓に対しては「検番」が設けられ、娼妓の取った客数や収入などを調査・管理した。また、日本では娼妓の年齢は一八歳以上と決められていたが、台湾などの植民地にはこの年齢制限は適用されず、台湾の人身売買の問題を悪化させる要因ともなった。台湾人娼妓のうち、芸旦と呼ばれるものは、歌と酒による接待のみで身体は売らなかつたとされている。彼女たちは六、七歳頃家を離れて、歌や詩などの芸を仕込まれた。またその芸は、日本のお芸者の影響も強く受けるようになった。名花と称された芸旦たちは文人たちによる詩に歌われ、また『風月報』などの新聞や雑誌に写真入りで紹介されることもあった。



名花と呼ばれた妓女・
月娥（邱旭伶『台湾芸妓風
華』玉山社、1999年）

こうした公娼制度の下で「合法的」売春をおこなうもの以外にも、史料に挙げた営業許可を得ない違法の娼妓もまた現れるようになつた。廖秀真は、史料のなかで「××主義」と伏字にされている部分は、「帝国主義」であるとしている。また、「野鷦」とは、違法の売春をおこなう私娼をさしている。私娼と無賴漢の覚醒を呼びかけるこの文章は、すなわち日本による植民統治に對して、社会からはみ出した人々こそ抵抗をおこなうべきだと主張するものであり、作者の植民統治への強烈な反発をみることができる。

台北の売春業の一大中心地は大稻埕で、「芸旦を見ずして大稻埕を語るなかれ」と言われた。しかしながら、酌婦やカフエの女給数が増加したこと、また台湾でも「戦時体制」がしかれたことによる社会情勢の変化を受けて、芸娼妓は次第に没落していった。敗戦により日本が台湾から撤退した後も、公娼制度は中華民国の制度として残存した。そこから隠れるかたちで営業をおこなつていた私娼の問題も継続し、廢娼は台湾女性解放運動の一つの大好きな焦点となつた。

まず一九四六年には、高雄で台湾婦女協会が結成された。社会の悪弊を改革し、女性の地位を向上させることなどを趣旨とし、女性教育の普及、社会風習の改良、慈善事業の発展、家庭生活の改善、社会道德の向上、そして娼妓の排除と救済を任務として掲げた。また、次項でも取り上げるように、四六年五月に謝娥、謝雪紅らを理事とする台湾省全体の婦女会が組織された。この省婦女会の実際的活動の柱となつたのは、参政権獲得運動と公娼の廢絶であった。

しかしながら、これが廢娼令といふかたちで実現されるまでには半世紀もの年月がかかつた。一九九七年、当時の台北市長（一九九〇年から総統）の陳水扁が「台北市管理娼妓辦法」を廃止して、台北市における廢娼を決定した。しかし、廃止に反対する声も強く（呂秀蓮の新女性主義）参照、馬英九市長時代の一九九九年になって二年間という期限付きで復活した。その後二〇〇一年三月二八日から廢娼は本格的に実施され、台北市は一〇〇年にわたる公娼の歴史に幕を閉じた。ただし、その時点では台湾の二二の県・市のうち高雄市を含む九つにはまだ公娼が残存している。

参考文献

- 廖秀真「日本植民統治下の台湾における公娼制度と娼妓に関する諸現象」『アジア女性史』（共通文献③）
- 邱旭伶『台湾芸旦風華』玉山社、一九九九年
- 陳惠雯『大稻埕在某人地図』博揚文化、一九九九年

（訳・解説 須藤瑞代）

4

国民党の女性政策——戒嚴令と宋美齡の指導

〔1〕「二〇年来の台湾婦女——台湾光復二〇周年を祝つて」（鄭玉麗、一九六五年一〇月一日）

日本統治時代においては、愛国婦人会という組織があつたが、しかしこの機構は日本統治階級の御用団体にすぎなかつた。参加者は、大半が高官貴族の奥様だったので、もっぱら植民地政府に代わつてお役人風の表面的な活動をするお飾りにすぎなかつた。まったく大衆に溶け込むことができず、「中略」参加したのは日本人女性ばかり、台湾女性は非常に少なかつた。光復以後、台北市の女性たちはまずみずから婦女服務大隊を組織した。一九四六年二月には、台北市婦女会が成立した。その後嘉義、新竹などの県で婦女会が相次いで成立した。同年五月には、第一回全省婦女代表大会が召集され、ここにおいて台湾省婦女会が正式に成立を宣言した。台湾の女性運動は、これより積極的におこなわれ、二〇年にわたる苦心の運営、我々全省の姉妹たちの心を一つに合わせた努力によって、ついに台湾女性運動の基盤が堅固なものとなつたのだ。

〔二〕「二〇年来的台灣婦女——為敬祝台灣光復二〇周年而作」（台灣婦女月刊）第一二二期、台灣婦女協會、一九六五年一〇月）

〔2〕「女性は家を治め國に報いる二重の責任を負わなければならぬ——民国四三年三月八日國際婦人デー祝賀大会における訓辭」（宋美齡、一九五四年）

今日の女性は時代の要求によつて、二重の責任を負わなくてはなりません。家庭を治めなくてはならないうえに、さらに国家に奉仕しなくてはならないのです。それゆえに必ず自己を充実させ、自己を敬愛し、一人の現代女性として「良妻賢母となり、國家と民族をまもり、よい公民である」という目的に到達しなくてはなりません。さらに肝要



三つの世紀を生きた
宋美齡（中央婦女工作会
編『蔣夫人言論選集』中央
文物供應社、1980年）

しかし、一九四七年一二・二八事件が勃発した。これは、大陸から来た外省人の横暴に対する本省人（戦前から台湾に居住していた漢族）の不満が爆発して反乱となり、それが武力で鎮圧されて多数の犠牲者を出した事件である。事件は全島に及ぶもので、本省人と外省人の間に深い溝をつくった。この事件で台湾省工作委員会は活動が一時停頓するが、六月に鄭毓秀が引き継ぎ、再び活動を開始した。

一九四九年末に、共産党との抗争に敗れた国民党の中央政府が中国大陸から台湾に移り、蒋介石が台湾で「中華民国」総統の職務を続行した。台湾には戒厳令が敷かれ、集会・ストライキやデモなどの行動が禁止された。こうした状況の下、女性運動も台湾人女性によるのではなく、国民党が主導するものが主流となっていく。その先頭に立ったのは、やはり宋美齡であった。五〇年二月、宋美齡は女性リーダーたちとともに台湾全島をまわって軍隊の慰問をおこない、また各地の女性たちとも懇談した。そして、四月一七日には、中華婦女反共抗俄（ソ連）連合会が設立された。これは八六年に中華婦女反共連合会、九六年に中華婦女連合会と名称を変更し、現在にまで至っている台湾最大の女性団体である。五一年には分会四九、支会一七二、工作隊七三であったのが、九五年には、分会七九、支会四五七にまで成長している。

一九五四年、宋美齡は中華婦女反共抗俄連合会の国際婦人デー祝賀大会で、史料【2】にあげた演説をおこない、女性たちが「良妻賢母となり、国家と民族をまもり、よい公民である」ことをめざすべきであると主張した。良妻賢母としての役割、そして国家への奉仕が、最終的には国民党政権最大の願いである共産党政権打倒の主張につなげられている。その後大陸では一九六〇年代から共産党により人民公社化が推進され、つづいて文化大革命では家庭や私生活が徹底的に破壊されたが、台湾では、宋美齡がそうした大陸での動きに対抗するかのように女性の家庭における役割を強調し、「模範的女性」を選抜するなどの宣伝工作をおこなった。こうした女性団体の組織化は、宋美齡がかつて新生活運動のなかでおこなったものと軌を一にするものであり、彼女の「女性同胞」に対する指導方法は一貫していたことがわかる（第四章「新生活運動と『婦女工作大綱』」参照）。

このような上からの女性解放論に対抗し、一九七〇年代からは呂秀蓮によつて、新たなフェミニズムの摸索が始まつていく。

（訳・解説 須藤瑞代）

解説 一九四五年日本は敗戦を迎え、日本による台湾支配は終結した。台湾省行政長官陳儀ら国民党政権の台湾接收委員が、日本の植民地統治当局から施政権を引き継いだ。それまで総督府のもと思想・行動の厳格な統制下に置かれていた台湾の人々にとって、「光復」（中華民国への復帰）は喜ばしい出来事であった。女性たちも、各地で女性団体を自主的に結成しはじめた。史料【1】にあるように、四六年五月に謝娥を理事長、謝雪紅らを理事とする台湾省全体の婦女会が組織された。史料【1】を書いた鄭玉麗もまた、この台湾省婦女会の設立に尽力した一人であり、理事の一人でもあった。

台湾省婦女会の理事長に推された謝娥は、反日の言葉を壁に書いたとして一年余り投獄された経験をもつてゐる。省婦女会の活動は、特に公娼廃絶と女性参政権獲得に力を入れるものであつた。第一回選挙で各県市参議員を選出した際には、謝娥ら婦女会のメンバーを含む女性参議員七人が当選した。四六年一〇月の制憲国民大会台湾代表補欠選挙では、女性にも一名の枠が与えられ、やはり謝娥が当選することとなつた。

このような台湾人女性主導の女性運動が活発化する一方、台湾を統治する立場に立った国民党による女性の組織化もスタートした。中央婦女指導委員会委員長で蒋介石夫人である宋美齡が指導し、それに台湾行政長官陳儀の妻古月芳などが協力して、四六年一二月に中央婦女指導委員会台湾省工作委員会が作られた。

なのは人徳を養い、知恵と才能を強化し、力を結集し、いつそ協力し、「中略」物質によって前線を支援し、精神によって後方を安定させ、「中略」國を取り戻し再建する基礎を打ち立てる、これが女性同胞が現在背負わなくてはならない責任だということです。将来私たちが大陸に戻つていって、同胞を救い出し、民族復興を実現したとき、女性同胞は中華民国復興史上に光り輝く一ページを占めなくてはなりません。全国の女性同胞たちに願います。できる限り早く、互いに信じ合い互いに助け合つてみずから輝かしい歴史を書きとどめ、来年の今日にはいつそ偉大な成果を収穫していることを。

〔婦女要負起治家報國の双重責任——民国四三年三月八日婦女節慶祝大会訓詞〕【指導長 蔣夫人対婦女訓詞】中国国民党中央委員会婦女工作会編印、一九七九年）

参考文献

游鑑明「台湾地区的婦運」「近代中国婦女運動史」(共通文献⑯)

スター・リング・シーグレーブ著、田畠光永訳『宋王朝——中国の富と権力を支配した一族の物語』サイマル出版会、一

九八六年

陳鵬仁『蔣夫人宋美齡女士言論選集』近代中国出版社、一九九八年

伊藤純・伊藤真『宋姉妹——中国を支配した華麗なる一族』角川文庫、一九九八年

5 呂秀蓮の新女性主義——台灣フェミニズムを拓く

「新人間性社会に向かつて」(呂秀蓮、一九七四年)

永遠に続く未来の年月において、我々は女子の独立自主の人格と尊厳が、すべての男性と同様に承認され、尊重されることを願う。我々はまた、女子の天賦と後天的な教養学識が、男子のそれとまったく同じように大事にされて用いられることを願う。我々はさらに、新しい人間性の新しい社会のなかで、男女の関係は抑圧ではなく支え合いであり、争いではなく助け合いであり、「べきだ」ではなく「したい」であることを願う。夫は妻が彼のためにつくして「たい」と思うようにさせることはできるが、妻にお茶をくむ「べきだ」と命令してはならない。また妻は夫がお金稼いで湯水のように使わせてくれる「べきだ」と思ってはならない。

最後に、以下の一〇個の問題を出そう。自分の心に聞いて、自己診断してほしい。これらの問題が問題にもならなくなつたときこそ、新しい人間性、新しい社会ができるがあがつたことを示すのだ!

- 1、女の知恵は一般に男より劣ると思いますか？
- 2、才能のぬきんでた女子を素晴らしいと思いますか？
- 3、もしもあなたの上司が女だったら、どう感じますか？
- 4、そのほかはすべて理想的でも、「彼女」の学歴があなたよりも高いか、あるいは学歴は同じでも才能があなたより優れていたとしたら、彼女を妻に迎えたいと思いますか？
- 5、彼女——あなたが憎からず思っている女の子——があなたより先に愛情を告白したら、どうしますか？
- 6、あなたは失業しましたが、でも奥さんには仕事があります。家について子どもの世話をや家事をしたいと思

いますか？

七、あなたの仕事はどこででもできる仕事ですが、奥さんは転勤で引っ越さなくてはなりません。あなたは彼女についていきますか？

八、あなたの職場には社宅がありませんが、奥さんのほうにはあります。奥さんの社宅に住んでも平気ですか？

九、奥さんが子どもを生み育てるのに、子どもは一人も彼女の姓を名乗ません。理にかなっていると思いますか？

一〇、あなたが外で浮気をしているとき、奥さんも愛人をもつてもよいと思いますか？

〔邁向新人生的社会〕『新女性主義』幼獅月刊社、一九七四年、一九三頁）

解説 呂秀蓮は、台湾フェミニズムの先駆者であり、二〇〇〇年に民進黨の陳水扁が国民党を破って政権を握った際には、副總統に就任した。彼女は一九四四年、台湾桃園県の保守的であまり豊かとはいえない家庭に生まれた。幼い頃から成績優秀で、台湾大学法学部に入学し、大学院在学中にアメリカのイリノイ大学に留学した。後年、ハーバード大学でも法修士号を取得している。一九七一年ごろから男女平等に関する講演を相次いでおこない、七二年三月八日に台湾大学での講演で正式に「新女性主義」を掲げた。彼女の主張する新女性主義は、「まず人となり、それから男性あるいは女性となる」「人はその才能を尽くすべきだ」というスローガンに集約されている。こうした主張は、アメリカで見聞きした女性解放運動の刺激を一定程度受けているが、決して「舶来品」ではなかつた。彼女自身の問題意識にもとづき、台湾の男女卑屈的法律を批判し、妻にも財産権を与えること、中絶を合法化することなどを主張したのである。

呂秀蓮は、すべて女性によって構成される拓荒者出版社を設立し、また反国民党の人々による実質的な政治団体だった美麗島雑誌社の副社長となるなど積極的に活動をおこなつた。ところが、いわゆる「美麗島事件」に連座し、軍事法廷で二年の刑を言い渡される。美丽島事件とは、一九七九年に高雄市で美丽島雑誌社が開いたデモで起つた衝突をきっかけに発生した、台湾自治・独立思想運動に対する国民党的弾圧事件である。逮捕された呂秀蓮や女性解放運動家に対しては、「ヒステリー女の集団」といった悪意に満ちたキャンペーンが連日テレビで流されたという。この事件の被告たちは、

弁護を買つてたのが、当時は若き弁護士だった陳水扁であった。結局呂秀蓮は、八五年に病気のため一時出所が許されるまで、五年半牢につながれた。出獄後は李登輝政権のもと、立法院で外交委員を務め、また出身地である桃園県の県長になるなど、積極的な政治活動をおこなう。そして二〇〇〇年には副總統に就任した。

呂秀蓮以外にもフェミニズムの新潮流は起つた。呂秀蓮が獄中にあつた一九八二年、呂秀蓮の友人でもある李元貞らが、月刊『婦女新知』の出版を開始した。李元貞は「嫁」としての生活のなかで、婚姻形式が女性に与えている束縛を痛感し、苦しみ、そして離婚した。その後アメリカ留学中に、自分の置かれていた境遇は決して例外ではなくかったことを悟つた。帰国後、女性を目覚めさせ、女性を支援することなどを趣旨として『婦女新知』を発刊した。そこでは、フェミニズムの観点から文学や映画が論じられ、また女性に関する法律についても活発に議論された。

一九八五年には、台湾大学人口研究センター婦女研究室が設立された。これは九九年に「台湾大学人口とジェンダー研究センター」と改称され、台湾のジェンダー研究の拠点の一つとなつてゐる。さらに八七年に戒嚴令が解除されると、以後、自發的な女性団体が大幅に増加し、国民党の指導下にあつた中央婦女工作会にも少なからぬショックを与えた。九〇年代に入ってからは、新知グループと女性学学会などが、男女平等教育、レイプを犯罪と認めること、男女平等労働法の早期成立などを主張し、大規模なデモをおこなつて話題を呼んだ。また、台北市の公娼存廃をめぐつての論争では、台湾フェミニストの意見も多様化し、多数を占める廢娼派に対して、女性の情欲を重視する「性解放」論者や売春女性の労働権を主張する論者は、公娼制支持を表明した。

参考文献

- 石塚友子「新女性主義」を掲げて——台湾の女性解放運動』『季刊中国研究』第一九号、一九九一年
- 游鑑明「台湾地区的婦運」『近代中国婦女運動』（共通文献⑪）
- 中国論壇編輯委員会『女性知識分子與台灣發展』台北、聯經出版、一九八九年



呂秀蓮
(李文『縱橫
呂透蓮前伝』
五十一年
時報文化
出版, 1996年)